

リーダーシップ研修 実施報告書

【演題】哺乳類の再生現象—毛の再生から四肢の再生へく性別や国籍を超えたコラボレーションを目指して>

【講師】伊藤 真由美氏（ニューヨーク大学医学部皮膚科・准教授）

【日時】平成 29 年 10 月 27 日（金） 15:00～16:30

【場所】岐阜薬科大学本部 大学院講義室

【参加者数】45 人（うち女性研究者 9 人）

講師は、大学院修了後に民間企業に研究職で就職し、そこで興味を持った研究を続けたいとアメリカの大学に留学、現在は研究室主宰者として大学に勤務するという経歴を持つ。

留学を決める際も、自ら研究主任の教授に手紙を書くなどアプローチをした。しばらくの後タイミングよく人員があいたためラボに入ることができたという。その積極性が功を奏したと言えるだろう。



主宰するラボには、性別や国籍が違う学生や研究者が集う。日本人の男性ポスドクがいれば、インド人女性のドクターコースの学生もいる。このように様々な出自、背景を持つ人々をまとめて研究活動を進め、論文を発表し、成果を上げていく必要があり、また、実際に成果を上げている。

現在ラボを主宰する立場になり、とても幸せだという。それは、重要だと思う課題や自分が興味を持った課題をとことんつきつめていくことができ、大変なことでも好きなことであるため楽しいと思いながら仕事ができるから、ということであった。リーダーになるというのは、このような良いことがある。

仕事を続けるために、「野心をもつこと、明らかにすること」が重要だと言われた。野心を明らかにすることは、女性は特に恥ずかしがると思うが、研究課題として自分がやりたいと思うことは表に出した方が良く、キャリアゴールも明らかにした方が周りもサポートしやすくなるだろうことであった。

女性であれば、結婚、妊娠、出産という道を通る可能性がある。講師はどれも楽しく過ごせてきた。仕事はセーブしながらできる範囲で一所懸命にやってきたという。

講演会中では、女性が研究室を主宰するということ、殊に外国の大学においてはどのようなことであるのかはあまり聞けなかったため、事前によくお願いをしておくべきであった。

しかし、研究（仕事）が好きで、自分のラボを持ち、楽しく仲間たちと研究活動にまい進している様子がよく分かり、今後ラボ主宰者を目指す立場の研究者にとって励みになる講演会であった。